論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（　学術　　）	氏名	井　浪　真　吾
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当		

論　文　題　目

『宇治拾遺物語』の表現性に関する研究　―教材化にむけて―

論文審査担当者

主　　査　　教授　　竹村　信治
審査委員　　教授　　山元　隆春
審査委員　　教授　　佐藤　大志

〔論文審査の要旨〕

本論文は、「古典嫌い」「古典離れ」が問題化している中等教育における古典（古文）教育をめぐって、その課題の一つである教材開発のあり方を、古典文学研究と古典教育とを架橋する立場から検討したものである。題材を鎌倉初期成立の『宇治拾遺物語』とし、第一部において作品研究（先行研究の整理／作品分析）を、第二部においてその教材化（古典教育観の整理と提案／学習材の開発）を試みている。

序章「研究の目的と方法」に続く論文の構成は、次のとおりである。

第一部『宇治拾遺物語』の表現性とその位相

第一章「説話研究と『宇治拾遺物語』研究の現在」では、1980 年代に作品論から言説論へと大きく転換した説話及び『宇治拾遺物語』の研究史を概観し、第二章「先行研究に見る『宇治拾遺物語』の表現性」では、先行研究をもとに、表現性（言語行為主体の言語行為の全過程のあり方）を分析する手法を「『宇治拾遺物語』のテキスト観」「同話・類話との比較」「説話の語られ方」「説話排列、説話の位置」「各章段の言述」の各項に即して整理している。第三章「『宇治拾遺物語』の表現性の実際」は、整理した分析手法の有効性を第 16 段、第 17 段、第 30 段、第 61 段、第 63 段に確認したもので、その表現性が流通する言説を相対化し、話題との対話を通じて問題領域を開きこれに応答しつつ世界と対峙していく位相にあることを明らかにしている。第四章「『宇治拾遺物語』と言語場」では、そうした『宇治拾遺物語』の表現性を可能とした言語場について、文学場（後嵯峨院時代の歌壇における御子左派と反御子左派との対立状況）、仏教場（鎌倉時代の顕密仏教・穏健改革派・急進改革派〈異端〉の対立状況）を和歌研究、仏教史研究の知見を参照しつつ検討し、文学場において守旧派藤原為家を批判する反御子左派真観〈藤原光俊〉の表現志向、仏教場において権門化した顕密寺社の仏教言説に拮抗した法然の選択本願念仏論に『宇治拾遺物語』の表現性との相同性を指摘し、その同時代的な位相を明らかにしている。

第二部『宇治拾遺物語』の教材化

第一章「古典教育の目標と古典教材」では、第一節「中等教育における国語教科書の中の古典教材―説話教材を中心に―」で中等教育の現場で用いられている国語科教科書の中の

古典教材の現状を説話教材を中心として調査し、説話（集）＝民衆の文学とする教材観が更新されないまま入門教材として扱われていることを確認、ついで第二節「国語教室で創られる〈古典〉―国語教育誌の中の〈古典〉」で、2008～2013 年間の各種国語教育誌に掲載の実践報告や論考を考察し、古典授業が「ナショナリズムへの接続」を用意し、「日本文化の多元性」「古典テキストの読みの深度」「〈知〉の停滞」などに課題を残していると指摘している。第三節、第四節ではそうした現況を克服する古典教育観を求めて益田勝実の古典教育論を検討し、第三節「公共性・主体・古典教育―50 年代における益田勝実古典教育論―」に 1950 年代の益田が公共性構築を担う主体の育成を図る古典教育を、第四節「公共性・言説の資源・古典教育―60 年代における益田勝実古典教育論―」に 1960 年代、誰もが公共性にアクセスできるように学習者の言説の資源獲得を図る古典教育を構想していたことを明らかにし、そこに準拠すべき古典教育観を見出だしている。こうした古典教育の現在の検証と古典教育観の検討を経て第二章「『宇治拾遺物語』の教材化の構想」に到り、その第一節「教室の『宇治拾遺物語』」で中等教育現場の国語科教科書や実践報告、提言などでの『宇治拾遺物語』の扱いを点検し、そこに認められた第一章第一節第二節同様の課題の解消に向けて、第二節「『宇治拾遺物語』の教材化にむけて」で益田勝実古典文学論を斎藤純一「公共性論」やM・バフチン「言語論」と接続させ、古典学習の場を公共的な空間にすることの必要性に言及した上で、第三節「『宇治拾遺物語』の教材化案」において、流通する言説の相対化、話題との対話を通じた世界との対峙、問題領域の開示と応答をもって「公共空間」を構築しそこに参与する『宇治拾遺物語』の学習材としての可能性を説き、これに学びつつ古典教室を公共空間となす教材化案を第 104 段を取り上げて提案し、結章「研究の総括と展望」で結んでいる。

本論文は、次の５点で高く評価できる。

１．説話及び『宇治拾遺物語』に関する古典文学研究の成果を周到、正確に把握し、その事例検証においても文学研究査読誌に掲載される新見を提示したこと。

２．『宇治拾遺物語』の表現性の位相をめぐって、同時代の言語場（文学場／仏教場）との相同性を見出だし、『宇治拾遺物語』研究に新たな観点を提供したこと。

３．古典教育の現況について、その課題を教科書調査、膨大な実践報告や論考の考察を通じて闡明したこと。

４．古典教育観の考察にかかわって、1950 年代 1960 年代の益田勝実古典文学論を検討し、そこに現在にも接続可能な「公共性構築を担う主体の育成」「言説の資源獲得」の構想を見出したこと。

５．古典文学研究と古典教育とを架橋する研究の一つのモデルを提示し、具体的な教材化を提案したこと。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成３１年　２月　１３日